

論文の内容の要旨

論文題目 植民地支配と「青年」—台湾総督府の「青年」教化政策と地域社会の変容—

氏名 陳 文 松

研究の目的と方法

本研究は、「青年」の政治社会史的視野を通じて、従来の学校史、教育史、そして抗日運動史の文脈において分断されて語られている植民地統治の実態や植民地社会の変容を、日本統治時代の全ての時期にわたってに検証することにする。特に、植民地統治の要であった国語学校やその卒業生の「青年集団」的歴史を究明するために、単なる政策面ではなくて、「学歴」的・職業的側面も注目していく必要がある。また、植民地統治の要としての国語学校に対して、政策の受け皿である植民地社会を観察する対象として、台湾中部の草屯洪氏一族を事例研究としてとりあげることにする。

論文の構成

本研究の構成を縦軸として植民地政府が半世紀にわたってきた「青年」教化政策の実態やその変化を4章構成の第1部で検討し、横軸として植民地政府の「青年」教化政策に反映された植民地社会における「青年」像や地域社会の変容を同じく4章構成の第2部で見ていく。

主な達成ないし発見

1、本論文の成果 — 植民地台湾における「青年」とは何か

(1) 協力メカニズムの構築

— 「青年」の創出・拡大、絶えまない「青年」の争奪(第1部)

第1部では、「青年」教化政策の視点から、植民地政府と植民地社会との相互関係を考察し、1896年

台湾総督府国語学校設立、1926年台湾総督府文教局設置や1944年台湾総督府青年師範学校の設立を主たる観測点として、植民地全期における教化政策としての「青年」像の変化を描き出すことを試みた。

植民地政府の教化政策において、時期や植民地社会・帝国政府の事情によって、「青年」の定義は一様でなかったことが確認できる。それは、初期の国語学校の「新領土経営者」、中期の総督府文教局（青年団）の「次代社会の担当者」、そして末期の青年師範学校の「皇国青年（皇国民）の指導者」へと変わっていったのであった。スローガンの変化につれ、「青年」の中身も中等教育修了者から公学校卒、ついには、学歴を問わない一定の年齢層へ拡大していった。また、末期には、「皇国青年」の台湾人青年層に対して、もはや「二重言語読み書き能力」を育成するのではなく、むしろ母語を徹底に排除し、日本語能力を強要する政策へと転換してしまった。一方、「青年」教化政策によって生まれ、1920年前後以降植民地支配に反旗を翻した「台湾青年」は、1920年代から日本帝国の敗戦にかけて、しだいに厳しくなる思想弾圧と軍事動員の中で、その「二重言語読み書き能力」を使って、月刊『台湾青年』から日刊『台湾新民報』などを舞台に「書く」という実践を通じて植民地政治を批判し続け、台湾人自治という夢を一度も捨てることはなかった。

(2) 「伝統による抵抗」の底流

—— 板挟みの存在として地域社会「青年」像(第2部)

第2部では、植民地統治政策の展開を中心に見る第1部とは違って、清朝時代より「四大姓自治」伝統を有した台湾中部の草屯地域という地域社会の視点から、植民地支配のあり方と「青年」の相互関係を明らかにしようとした。地域社会の変容や「青年」教化政策の確立の過程を背景としつつ、何よりも地域社会に生きた「青年像」を描き出すことを眼目とした。そこでは、焦点を当てた洪氏一族——洪元煌と四大姓の青年達が、どのように地域社会の伝統を生かして足場を固め、台湾全島や日本本土での活動と連携しながら、地元で植民地支配と終始一貫して戦ってきたかを明らかにし、従来看過されてきた植民地支配に対する「伝統による抵抗」の実態をさらに一層鮮明にできたと考える。総じていえば、彼らは、植民地政策と地域社会伝統の挟間の中で、「二重言語読み書き能力」を活かして、近代的知識を取り込んで地域社会の発展に貢献しようとし、植民地支配体制に抑圧されながらも地域社会の伝統を足場として自ら選ぶという道を歩んだと言える。「抵抗か迎合か」の二元対立の図式を超えて、新たなグレー・ゾーンをつくりだしたともいえるだろう。

2、「青年」から見た抵抗と協力のメカニズムの挟間・軋轢

(1) 日本帝国の公定ナショナリズムの「青年」像

本論文は、「青年」教化政策に焦点を合わせながら、学校教育と社会教育との双方に目配りして、半世紀にわたった植民地支配と「青年」の実際の動向を分析した。そこでは、教育(教化)政策の変容を、府国語学校、府文教局、そして府青年師範学校を論述の三つの焦点として、各時期や植民地社会の変化を見極めたうえで、それぞれの特色や実態を明らかにし、教化政策イコール「青年」教化政策の本質を見出したのである。

一方、「青年」教化政策の解明によって、従来同化政策の目標を「台湾人全体」を対象とした前提とは違う視点を提供することができた。言い換えれば、同化政策の建前が「台湾人全体」としたものであるこ

とは否定しがたいが、政策には戦略的な優先対象があった学校教育政策にせよ、社会教化政策にせよ、その第一位の優先対象となったのは、「植民地青年」にほかならなかったのである。

(2) 抗日台湾ナショナリズムの「青年」像

本論文では、台湾青年が唱えている「青年」概念について、前述した日本帝国の公定ナショナリズムの「植民地青年」とは異なる、以下のような三つのタイプが存在したことを示した。

まず、留学生の内地留学を通じて、もっとも植民地宗主国の近代化の洗礼をうけ、内地のモデルを模倣するタイプである。すなわち、台湾青年、徐慶祥が 1920 年、提起した「台湾型」青年団の青年概念である。

第二に、台湾青年、医学校出身の医師蔣渭水、王敏川、許乃昌らが 1923 年発起した台北青年会や共産主義思想を有した青年団体(読書会)に代表されるタイプである。こういった青年会・読書会は、すぐにも警察当局から「共産主義」の過激思想を有した青年団体と認定され、結社禁止処分をうけ、あるいは厳しい監視や弾圧をうけ、成立にいたらなかったものの、ソ連の共産主義革命といった西洋近代思潮から影響を受けた階級的な青年概念である。

第三が、1924 年結成された草屯炎峰青年会に例示される(第 8 章)タイプである。青年会のリーダー洪元煌は、梁啓超をはじめとして「祖国」中国近代知識人の思想を強く受けていた世代であった。だが、留意したいのは、すでに触れたように、陳独秀の「新青年」は西洋文化の受容を前提にして、古い伝統に対してトータル的な批判(「陳腐」)を行ったのであるが、植民地の事情を有した台湾社会に生きた洪元煌は、古い伝統(「美風」)を盾とし、植民地支配の専制政治に対するトータル的な批判を行ったのである。

(3) 伝統教育の歴史記述と「台湾青年」

本研究では、伝統漢詩人の活動や作品を通じて、植民地台湾の社会・教育・政治とのかかわりを連結し、「青年」教化政策や地域社会の視点から、植民地初期から末期までの伝統漢詩人の抗日台湾ナショナリズムを如何に誕生・伝承・維持されていく歴史的背景や実態を明らかにした。

(4) 伝統の変容と学歴 —— 広域的な抵抗と「地域青年」

近代学校制度の学歴やそれを前提とする職業の導入によって、学歴としての特権の学縁関係は、「創られた伝統」として地域社会にもたらされ、新たな広域的な交流や社会移動の可能性が生み出された。本研究では、「草屯の婿」である洪深坑、呉万成や黄洪炎の事例を紹介した。ここで注目したのは、地縁・血縁のネットワークを越えての学縁の参入によって、この新たに創られた「青年」の形態によって伝統的な文人結社の形態が近代青年団体へと生まれ変わったことである。それによって、広域的な地域間の交流や連結が、青年有志の結合も点から面へと広がっていった。したがって、植民地支配への抵抗運動が全島的な政治運動としては次々に植民地政府から弾圧されても、こうした広域的連結は社会に底流し続けた。

戦後、国民党の支配下におさめられた台湾社会には、林献堂をはじめとして彼らを「台中派」のカテゴリとして分類され、数少ない台湾人の広域的な派閥のひとつとしてみなされた。本論文は、一地域を越えた血縁・地縁・縁組・学縁関係により、築き上げられた広域的な連結が抗日運動の背後に存在したことを明らかにしたと言える。

(5)「青年」教化と学歴 —— 学歴としての特権と学縁ネットワークの構築

こうした抵抗的な広域的連結に対して、「植民地青年」として植民地支配体制を台湾社会の側から支え協力する連結も存在した。本研究で取り上げた国語学校とその卒業生は、こうした協力的連結の中核であった。抵抗側の立場からは、彼らを「大国民」、「御用紳士」、そして「三脚仔」と呼んだ。しかしながら、注目したいのは、協力的連結にせよ、抵抗的連結にせよ、連結を川の流れとみなしてみると、そのどれも清流ではなくむしろ濁流であったと言えることである。なぜなら、どの「連結」にしよ、抵抗か迎合か、反日か親日か、黒か白か、明確な一線を引くことが難しいからである。

総括

総じていうと、本論文では、半世紀にわたった植民地期台湾における、植民地支配と「青年」両者の相互関係について、こういったさまざまな流れ(底流＝伝統による抵抗、激流＝ナショナリズムをめぐる青年の争奪、本流＝協力的な「青年」集団)が共存し、また相互に軋轢を生じさせていた「青年」教化政策の実態を通して明らかにした。彼ら「青年」は、常に、伝統と近代、支配と被支配、政策と地域社会の挟間の中に生きていたのであった。最後に、本研究の主題について振り返って見ていると、植民地支配にせよ、地域社会にせよ、「青年」という主語は、前提抜きに成立するわけではない。その前提の形成から出発して、植民地支配終了後まで植民地「青年」教化政策の展開とそれが残したものを確認したこと、これが本研究の最大の成果である。